

## 第2回「現在」研究会

## 歪曲された梁漱溟

## 研究への論難

第2回の「現在」研究会は、7月5日(日)1時半からセンター事務室で開かれた、報告者は、神戸女子大学教授中尾友則氏。氏の研究は『梁漱溟の中国再生構想―新たな仁愛共同体への模索』(研文出版)として公刊されている。以下は、その事後の討論を加味した概要である。

梁漱溟は、毛沢東と同じ年の生まれであり、毛没後12年を生きた。若くして郷村建設に志し、軍閥支配下の農村にあつてさえその再建活動を展開したという人物である。彼は、毛沢東が、郷村再建の最大のガンである地主制を打破したことを高く評価する。しかし、反面、毛の農業改革―人民公社を最大の誤りだと批判する。

中国農業の再生にとって二つの障害のうち、外側の障害Ⅱ地主制の打破の点で毛沢東は輝かしい成功を収

めた。だが、その内側の障害の打破には毛は失敗したというのである。そして、内側の障害を乗り越えて中国農業を再生させる道こそ、若き日の梁が試みた農村建設の方法そのものであると、激しい文革中の批判にも耐え抜いた最晩年の梁は発言し続けた。

その方法とは何かといえば、共同精神に支えられた自立的生産主体の創出に他ならない。梁の見るところ中国の農民は、一般的、大衆的には自立性において未だ欠けるのであり、その確立こそが、喫緊の課題なのだ。

その際、農民大衆の先頭に立つべき高い生産力の保持者が、往々にして己の利益だけを排他的に追求し、ひ弱な隣人を自らの支配下に置く傾向がある。それはまた、人民公社とともに新たな隷従を生むことになり、自立的農民の大衆の成立を阻む危険があるとする。そして彼は、儒教の仁愛思想を援用しつつ相互協力を力説し自立的生産主体の創出を目指す(そうした内面的な主体形成こそが

梁の課題であったが故に、かつて軍閥支配下にあつてさえ彼の運動は展開され得たのである)。

90歳を超える最晩年、梁はこうした自らの思想を説き続けたという。だが、中国の学会の一部では、そうした梁の主張を、自立的主体の形成、市民社会の形成、そのルールに基づく憲政(権力者を規制する)の主張の点を一面拡大し、これを彼らにとって好都合な「新自由主義」的文脈に置き換えて曲解するといった事態が発生している。中尾教授の報告は、そうした事態に対する憤激を込めた論難であった。そこにこそ、今回の報告の主眼点であったのである。

## 岡映研究会

7月12日(日)午後1時センター事務室菅木一成「戦後部落解放理論」

## 教育セクション

7月18日(土)1時半センター事務室出隆司「教師像の考察」